

巻頭言

英語，えいご，エイゴ

近畿大学医学部呼吸器外科
教授 光 富 徹 哉

医学を志すと英語を避けて通れない。論文も学会業績も英語でないとともに評価されない。そのうちにいろいろな会議に呼ばれて、英語でのディスカッションが要求される。これも医学関係ならばまだよいが、ビジネスの話が混じってくると、quorum (定足数) だとか unanimous agreement (満場一致) だとか、聞き慣れない英語が混じってきて苦勞する。多くの医師は英語論文を一応読むことはできるし、英語の論文をいくつも書いているのだが使いこなすレベルにはほど遠い人が大部分であろう。かくいう私も英語にだいぶ投資をしたものの、中級から上級になかなか進めず、苦勞をいまだに引きずっている。



中学校、高校時代の英語のテストの成績はまあよかった私であるが、実戦能力は皆無に等しかった。初めて英語国民と話したのはいつだったであろうか？たぶん大学卒業までに外国人と会話したことは合計しても5分以内である。医師になり、大学院には行って初めてこれでは拙い気がつき、週に一回一時間外国人講師に教室に来てもらい、友達ふたりと英会話を習ったのが少しながら継続的に英語を話すようになった始めである。English Journal という雑誌でヒアリングマラソンという企画があった。一日3時間英語を聞いて、年1000時間を達成しようというものである。大学院生の時代はウオークマン (知らない人もいるか？) で英語をききながら実験をしたものであったが、英語が雑音のようにバックグラウンドに流れているだけではさして役に立たない。そもそも英語音源を求めることも困難であった。当時も在日米軍の放送である FEN を聴くことができたのであるが、私の地元の福岡の板付基地は閉鎖されて久しく、三沢だの横田からの放送は高性能の短波ラジオをもってしても聞くに耐えるものではなかった。テレビの英語の二カ国放送もまれであった。現在のおふれるほどの英語を浴びることができる状況とは隔世の感がある。今から考えて一番役立ったのは“英会話とっさのひとこと”的な日常会話のフレーズを覚え込むことであったように思う。また、映画の科白を丸覚えするのも (挫折したもの) 有用であると思う。“Are you always this much afraid of being alone?” という映画「卒業」での Ben の科白は“日本人には言えない英語だね”，と妙に感心したことである。

初めて渡米したのは31才の時留学の折であったので、いまから思えばずいぶん奥手のアメリカデビューであった。少しばかりは英語はできるつもりであった私であったが、本場に行って小さな自信も打ち砕かれるのであった。文法等にこだわってキーワードが言えていない。文法はどうでも大事な一語が伝わればまずは何とかなるのである。最初の英語での研究発表は50人ほどの前でのラボミーティングであったが、随分と準備に時間をかけた。スライド作成はもちろん、しゃべりについては近くに住んでいた大学生を自宅に招いて食事をご馳走する代わりに指南してもらった。その結果発表は好評で少しばかり自信をつけ、この成功体験が次のステップへつながった事は事実である。帰国直前には ASCO での oral 発表までできるようになり、参加していた大学の後輩などに褒められて気を良くしたものであった。

これが自分の英語のピークと思っていたら、帰国後も学会や会議の参加の機会があり英語の必要性は更にふえてきた。最近では国際学会の運営の仕事に携わるようになり、このためこの年になってさらに英語ストレスが増している。まずは会議で人が言っていることを理解することが先決でさらにそれを仕切っていく力量が求められるのだが、大丈夫であろうか？日本では6-7千語の英語語彙は大学入試レベルであるという。1万語で英検一級、TOEIC860 以上であるそうなので、このレベルは日本の中では相当出来る人ということになる。一般的なアメリカ人では高卒で3万、一流大学卒業だと10万とかだそうで、native との差はそれ程であり、基本的な意思疎通ができるレベルから native なみになるにはそれくらい距離があるということである。知っている単語でもその意味を日本語を通して理解しては間に合わないのも至極当然である。

最近、中国やシンガポール等での学会の教育プログラムに講師として招かれることがあった。そういう時に英語で立派にディスカッションしているアジアの若い医師をみると、果たして日本は大丈夫か、という気になる。もちろん日本にも英語が堪能な医師はふえてきたと思うが、国際的なレベルとしてはどうだろう。日本には日本語の医学教科書があふれている。それはそれで良いことであろう。一方、アジアの小国で自国語の教科書がないためにハリソンとかセシルを読まざるを得ず、英語で講義をうけて医師となった方が英語レベルが高いのは当然である。

とはいえ、英語を使えば拙いなりに世界の人とコミュニケーションできることは素晴らしいことと思う。英語国民は日本人がもつこんな悩みに想像もつかずにいることは羨ましがっていてもしかたない。日本語と英語は文字も文法もちがう。日本語は母音も子音も少なく、世界で一番発音が簡単なのでないかと思う。英語を勉強するのは困難であたりまえである。海外観光客が増えたとはいえ、日本で生きていくのには英語をひとこともしゃべらなくても困難を感じるなどない人が大部分である。その環境で英語の力を進歩させていくのは当然大変なことであるが、頑張らねば。まずは英語を使う時間をふやそうと今年になって、英作文の課題が毎日届く HiNative というものを始めた。Netflix を英語字幕で視聴することも始めた。ウェブでの英会話は安価で時間にフレキシビリティが高いと評判であり、その導入も検討している。

英語に対する悩みは一生続きそうだが、少しでも苦手意識を減らすためには日々の努力しかあり得ない。もちろん一番大事なのは人格、そして伝えるべき知識や考えをしっかりと持っていることであることは言うまでもない。